

2日コースでは内1日、3日コースでは、内1日半をピアカウンセリングの講義と演習にあてている。このことから、少なくとも1日半はピアカウンセリングの講義・演習にあてなければ、「できる」レベルには達しないことがわかる。

「できない群」から、セミナーの不足部分について解答してもらった結果、セミナー後のフォローアップセミナーや全体的なセミナー時間を増やす必要があることがわかった。その他にも、各講義で、知識の伝達だけでなく、参加者同士で話し合う時間を希望する意見や、ピアカウンセリングのロールプレイの時間を増やす、コ・カウンセリングの回数を増やすなどの意見があり、内容を工夫し、じっくりと学べるようにする必要もあると考えられる。

実践に際して、必要・欲しいサポートを分類すると、勉強やスキル練習などの「学びの場・機会の提供」、実際にピアカウンセリングを行える「実践の場・機会の提供」、様々な情報の提供や指導などの「スーパーバイザー・アドバイザー的役割」で、その他には「物品・金銭的援助」「意見を押し付けない大人側の姿勢」等に大別できた。

4) 集団ピアカウンセリング

集団ピアカウンセリングの実践状況は約4割であった。対象者の項でも述べたように、地域でのセミナーでは、実践することが前提であるため、秋田県・福島県・新潟県・沖縄県北部保健所では、5割～8割近い実施率であった。また、第2回ピアカウンセリングセミナーにおいても、実践を前提とする（もしくは既に実践していた）地域に声をかけていたせいもあり、6割が実践を行っていた。一方、特に実践を前提とせず、自由公募であった第1回ピアカウンセリングセミナーでは25%にとどまった。このように、既に実践が計画され、そのためのサポートが出来ている状況では、実施率は高く、そういった背景がない場合は、実践が行われにくい傾向にあることがわかった。

実践しなかった理由としては、実践したいが十分な時間がないこと・実践できる能力が身に

ついていないという回答が多かった。各自の時間に関しては、セミナーとして対処できることは限られるが、時間をかけずに実践できるように養成すること、また、集団を対象としたアプローチについての時間を設け、実践能力を高めるようなプログラムが必要であると考えられる。

セミナーでの学びの活用状況では、個別ピアカウンセリングと異なり、活用の度合いに幅があった。特に知識的なものは、即実践に活用できるということもあり、非常に高い活用率であった。また、ピアカウンセリングの知識やアクティブリスニングの「基本的向き合い方も、実践する際の対人関係を築く上で重要であり、高く活用されていた。一方で、言語的なピアカウンセリングスキルは低い活用率に終わった。これは、1対1を前提とし、実際の演習も1対1で行われていたため、対集団にどのように活用していいのかわからなかったのではないだろうか。特に1対1でじっくり話をする「コ・カウンセリング演習」は非活用群を下回る活用率となった。

実際に実践した者・実践に向けて計画中の者から、セミナーの不足部分について聞いてみると、「コ・カウンセリング」「全体的なセミナーの時間」「ピアカウンセリングの演習」「フォローアップセミナー」等が多かった。「コ・カウンセリング」は、既に述べたように、集団での活用の仕方が不明確であったことが理由として挙げられている。「ピアカウンセリングの演習」も、対集団のための実践ではなく、また演習時間も不十分であったことが考えられる。また、実際にはうまくできないとの意見もあり、「フォローアップセミナー」等でのフォローが必要であると考えられる。

実践活動にあたり、必要・欲しいサポートについて分類すると、「実践する場・話し合う場の提供」「物品・金銭的サポート」「知識や情報などのスーパーバイズ・アドバイス」「日程調整・学校や大人に対してのコーディネート」とサポートを必要とする意見がある一方、「大人の助けは必要なし、見守りで」という意見もあった。

5) セミナーについて

「セミナーを友人にもすすめたか」という

質問に対し、8割以上が「思う」と述べている。このことから、全体としては、セミナーは受講者に受け入れられ、認められているものと思われる。

5. まとめ

以上の結果より、新しいピアカウンセリングセミナー像をまとめてみる。

まず、現段階レベルのプログラムであれば、大学生年代以上を対象にすることが適当であると思われる。対象を高校生に広げる場合は、既存のセミナーの内容を理解しやすいものに変える等の工夫が必要であろう。対象の専攻分野に関して、今回は他分野のケースが少ないために、看護学生が適当であるかどうかの判定は難しい。しかし、実践の際に時間がネックになることも多いため、時間に余裕のある、早い学年からのアプローチは有効であると思われる。

1対1のピアカウンセリングができるようになるためには、最低でも1日半はかける必要がある。さらに、「できる」ようになるためには、もっと時間をかけ、演習の時間や回数を増やし、フォローアップセミナーなどを実施していく必要がある。また、地域でのピアカウンセリング実践のためには、「学びの場・機会」「実践の場・機会」「スーパーバイズ・アドバイス」を学生に対して提供するシステム作りをし、ピアカウンセリングを実践できる環境作りをしていくことが大切である。

集団ピアカウンセリングでは、既存のセミナーでは、対集団に対するアプローチを学ぶ機会がなく、学んだピアカウンセリングスキルを活かしていない現状があるため、そういったことを学べるようにしていく必要がある。特に、ピアカウンセリングが1対1と集団で活用される場合とで、混乱をきたす可能性もあるため、それらを明確に伝えて行く必要があるだろう。また、セクシュアリティの知識が高く活用されているため、その部分のより一層の充実を図っていくことも大切であると思われる。また、実践能力を高めるために、模擬実践などを取り入れて行くことも有効であると考えられる。また、集団ピアカウンセリングの実施に向けてや、実施後のフォローアップセミナーなどを開催する必要

もあるだろう。地域で、具体的な実践活動を期待する場合、各個人が自力で開催するには限界がある。学校・行政等が実践のためのバックアップをすることは、地域での実践のためには必要であると思われる。具体的なサポートとして、「実践の場・機会の提供」「物品などのサポート」「スーパーバイズ・アドバイス」、そして「コーディネート」である。

II. ピアカウンセラー養成モデルセミナーの開催

Iの結果を踏まえ、新しいピアカウンセラー養成セミナーのカリキュラムを作成し、モデルセミナーを開催した(表1)。

1. セミナーの開催時期・場所・参加者の内訳
時期：2002年10月11日～14日（4泊5日）
場所：東京都八王子大学セミナーハウス

参加者：10県（沖縄・宮崎・佐賀・高知・岡山・東京・新潟・福島・岩手・秋田）
学生32名（女性26名、男子6名）、
引率者13名（女性）、

2. セミナー内容と方法：

第1章：セミナーの紹介……ゲームおよび講義

1. セミナー参加者の紹介
2. セミナーの目的と概要説明
3. セミナースケジュール
4. グランド・ルール

第2章：ピアカウンセリング……講義

1. ピアとは、
2. ピアカウンセリングとは、
3. ピアカウンセリングの基本概念
4. ピアカウンセリングの8つの誓約
5. 効果的なピアカウンセラーになるために

第3章：基本的スキルの開発……講義および演習

1. アクティブ・リスニング

2. コ・カウンセリングの演習

第4章：セクシャリティ……講義・演習およびグループワーク

1. セクシャリティ総論
2. セクシャリティ各論
3. ヒューマンセクソロジー
4. 恋愛に関する討論
5. STD

第5章：ピアカウンセリング実践実習……グループワークおよび演習

1. 企画づくり
2. 公開実践

第6章：まとめとクロージング……発表

3. 参加学生の評価

参加した学生は、以下のようにセミナーを評している。

◇普段話すことのない「性」「生」「価値観」「将来」「恋愛」を仲間と話合い、自分がとても成長したと感じた。

◇ピアカウンセリングの過程で、自分の根底にある感情を見つめなおし、自分を受け入れられ愛していくことができると実感できた。

◇全体に講義形式が少なく、グループの話合いで自らの意見をもつことができ、大変密度の濃い講座だった。

◇今までより自分の感受性が高まったと感じることができた。仲間と話している時に感じる嬉しさや安心感を頭ではなく心で感じる事ができた。

◇この講座を参考にしつつ、自分達のオリジナルなものを作っていきたい。

4. 伝達講習会の実施と報告

受講したすべての県において伝達講習会を開催していた。開催時間は2時間から宿泊をしての1泊2日の伝達講習会を開催していた。対象が高校生ではなく、仲間の大学生である点以外は、実際のプログラムの実施という形式をとっていたところが多い。また、10月の実践実習の

体験が自信を生み出し、チームワークや、向上心という点において効果的であった。そして、人に伝える難しさや、自分の感受性の鈍さなどに気づき、今後の課題としている学生がみられた。

5. ピアカウンセリングの実施と報告

受講したすべての県で3月末までに1回以上のピアカウンセリングを高校生対象に実施していた。開催時間は、2時間程度のところから昼食を囲む午前・午後の5-6時間をかけるところがあった。(表2参照)

ピアカウンセリングの実施が3月に行われたところがあり、セミナー受講者と各県の引率者からの評価表の結果は、現在集計中である。そのため、ここでは概要を報告する。

<事業主体>

県の健康福祉課や保健課等が主催となり、ピアカウンセラーをもつ学校が協力するという形をとるところと、ピアカウンセラーをもつ看護系教育機関が主催となって、高校や地域に呼びかける形をとるところの大体2つの方向性があった。

<参加した高校生の反応>

どの県においても参加した高校生からの反応は概ね好評であった。

今まで、知りたくても聞けなかったことや、知らなかったことがたくさんあったし、認識もできた。避妊法やコンドームの使い方の装着スキルについては今まで体験したことのない内容でありとても驚いた。学校ではここまでの深い話ではないので、自分のためになった。多くの同年代の人と話ができて、はじめは恥ずかしかったけど、やっているうちに楽しくなった。簡単にセックスのこと考えていたけど、性のことは真面目に考えようと思った。

<セミナー受講者の実施についての評価>

企画に関しては、高校生の思いをつかむこと、高校生の立場でものを考えるということ、視点を相手に合わせるといふことに苦労があった。

企画段階においては、お互いの思いを出し切るまで時間をかけることができなかった。ピアカウンセラー間の人間関係の調整も今度の課題である。

セミナーで習ったことは、実際にやってみると難しいということがよくわかった。とくに、基本的な向き合い方やスキルの使い方がまだ不十分だと感じた。

10月のセミナーの中で「たいへん役立った」内容は、ほとんど全員が、ピアカウンセリングの〈実習〉を選んだ。また、基本的な向き合い方・オープクエスチョン・パラフレーズ・コンドームネゴシエーションスキル・セクシャリティの概念・妊娠をした模擬事例を「たいへん役立った」に選ぶものが多かった。

開催時間が短い県においては、ピアカウンセリングというより、講義形式になりがちで、台本を読むと言う形に陥りやすかった。しかし、その認識は学生側にはっきりと「次回はもっとピアっぽいものをやりたい」と認識されていた。

〈引率者が考える今後の課題と展望〉

1) 催し時期の検討…ピアカウンセラー、高校生、関係者（高校の養護教諭など）の時間調整が難しい。看護学生であるピアカウンセラーと、高校生の行事や試験時期を検討すると開催時期を決めるのが困難であった。

2) 広報活動のあり方…参加者集めにたいへん苦勞する地域もあり、宣伝方法に工夫が必要である。また、ピアカウンセリングに対する理解のない地域もあり、誤解の内容に広報活動する必要があった。

3) ピアカウンセラーを継続して育てる方略…高校生を対象としたピアカウンセリングの実施に際しては、まだまだトレーニングの必要性を感じている。特に、ピアカウンセリングのスキルの向上には、繰り返しの練習が必要である。企画段階での仲間との葛藤や討議がうまく進まないことによる不全感も認められる。特に、高校生にとっての「本当のピア」になりうるのかという点や、台本を読んで講義形式になりがちなセッションをどのようにして改善するかなど、十分に時間をかけて取り組まなければならないという反省点も認められた。また、ピアカウンセラーは学生であり、学年進行や卒業によって活動の可能期限が短いため、継続した育成も望まれる。

1) ピアカウンセラーとしての活躍の場をつくる…上記3)の問題点を解決するためにも、単発イベントとしてのピアカウンセラーの活動ではなく、繰り返しスキルを使うことのできるピアハウスの活動の場を作る必要性を感じる。学生にとっては、ピアカウンセリングと、ピアエデュケーションとの違いに戸惑うものもあり、継続したフォローアップの場も重要である。

2) 企画内容の検討…高校生が求めていること、行政が求めていること、保健福祉事務所に求めていること、高校側が求めていること、養護教諭が求めていること、それらのすり合わせや調整の場が必要であるが、困難な場合が多い。

3) 地道なネットワークづくり…上記すべての項目と関連するが、ピアカウンセラーの養成をはじめ、活動の場を拡大するためにも、広報活動を行うためにも、行政をはじめとした、教育委員会や看護系教育機関、地域活動のさまざまな団体との地道なネットワークづくりが必須である。

4) 大人がピアカウンセリングを支援する方略…ピアカウンセリングの活動がまだ始動段階であるがゆえかも知れないが、大人が監視するような支援体制であれば、本来のピアは育たない。実演に際しても、多くの大人の見学者に囲まれてのイベントであれば、緊張した雰囲気となり、ピアカウンセリングの本質的な意図が損なわれる。企画段階での指導方法についても、ピアカウンセラーが、自ら気づいて試みるという方法を十分尊重するよう検討する余地がある。

表1. ピアカウンセラー養成モデルセミナープログラム

| 第1日目 | 第2日目 | 第3日目 | 第4日目 | |
|---------------------------------------|--|---|---|----------------------------|
| | 9:00 オープニング・エクササイズ | 9:00 オープニング・エクササイズ | 9:00 グループ実演発表 1グループ30分ずつ の実演×5 | |
| | 9:15 ピアカウンセリングの 基本概念 ーピアカウンセリング とは何か?ー | 9:15 ヒューマン・セクソロジー ライフライン 恋愛に関する討論 | | |
| | 10:00 休憩 10:20 ピアカウンセリングの 8つの誓約 | 11:00 避妊のスキル実習 | | |
| | 昼食 | 昼食 | | 昼食 |
| | 13:00 エクササイズ 「人間知恵の輪」 | 13:00 STD・HIV/AIDS | | 13:00 実演後のグループ評価 まとめ |
| | 13:30 基本的スキル アクティブ・リスニング | 13:30 グループワーク 「パートナーが STD に 感染したら」 | | |
| | 15:00 休憩 | 14:30 休憩 | | 15:00 閉講式 |
| | 15:30 セクシャリティ総論 | 14:45 ネゴシエーション | | |
| 16:00 受付 | | 16:00 実演企画の説明 | | |
| 17:00 開講式・自己紹介 | 17:00 休憩 | 17:00 各グループ作業 | | |
| 18:00 夕食 | 夕食 | 夕食 | | |
| 19:00 オープニング・エ クササイズ チャットタイム | 19:00 セクシャリティ各論 「人々の暮らしと生殖」 模擬事例：妊娠をした高 校生 | 19:00 各グループ作業 | | |
| 21:00 終了 | 21:00 終了 | 終了時間はグループ毎 | | |

表2-1. セミナー受講者のピアカウンセリング実施状況

| 受講県 | 項目 | 伝達講習 | ピアカウンセリング実施 |
|-----|------------------------------|--|--|
| 新潟県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年12月22日 9名参加 午前9時30分から午後3時 | 平成15年2月9日 中・高校生20名 午前9時30分から午後3時30分 柏崎健康福祉事務所、柏崎市教育委員会、柏崎市共済事業 LOVE コミュニケーション |
| 秋田県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年11月4日 19名参加 平成14年12月21日-22日 午前10時から午後4時および、 12月は宿泊研修 | 平成15年1月19日 高校生17名 リハーサル:1月11日、18日 午前10時から午後3時 秋田県秋田中央健康福祉センター LOVE YOURSELF - 今の自分を見つめてみよう - It's a MIRACLE |
| 岩手県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年11月21日 32名参加 午後12時30分から午後3時30分 | 平成14年11月2日 高校生23名 午後12時30分から午後3時30分 岩手県 ジブンが自分であるために |
| 福島県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年10月29日 12名参加 午後1時から午後3時30分 | 平成14年12月15日 高校生36名 午後0時30分から午後3時30分 福島県県北保健福祉事務所 LOVELY Peer |
| 沖縄県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年11月2日-3日 8名参加 宿泊:午前11時から翌日午後3時 | 平成14年12月23日 高校生12名 午前10時30分から午後2時30分 北部看護学校 自分のものさしをもとう'02 |
| 宮崎県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年10月28日および、 11月11日 | 平成14年11月16日および17日 高校生 24名および大学 生14名 午後1時30分から午後4時30分、および午前9時30分から 午後3時30分 宮崎県保健薬務課、延岡保健所 ピアカウンセラー養成講座 |
| | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | | 平成14年12月15日、23日および平成15年1月12日 午前9時30分から午後3時 宮崎県保健薬務課、宮崎保健所 |
| 岡山県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | | 平成15年1月26日 高校生16名 午前11時10分から午後3時50分 岡山県真庭保健所 Let's Talk!! 一愛と性について語ろうー |
| 佐賀県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年12月21日 17名参加 午前10時から午後5時 | 平成15年3月17日 高校生45名 午前10時から午後3時 佐賀県健康増進課 |

表2 - 2. セミナー受講者のピアカウンセリング実施状況

| 受講県 | 項目 | 伝達講習 | ピアカウンセリング実施 |
|-----|------------------------------|------------------------------|--|
| 東京都 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年11月21日および12月5日 20名参加 | 平成15年3月13日実施 高校生20名 午前10時50分から12時40分 杏林大学 LOVE MY BODY AND OTHERS |
| 高知県 | 日時・人数 開催時間 事業主体 テーマ | 平成14年12月7日 午後1時から午後4時30分 | 平成15年3月2日 高校生14名 午後1時から午後4時 高知県健康増進課 10代のための peer カウンセリング |

図1. 友人に性に関する悩みを相談されたとき、
セミナーでの学びをどれだけ活用しましたか？

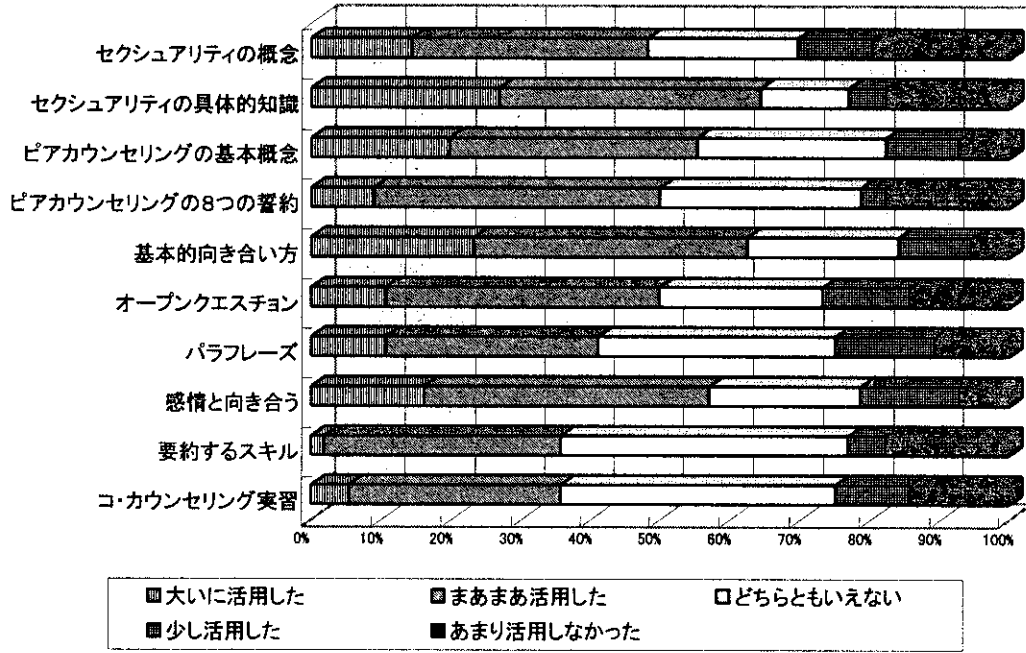
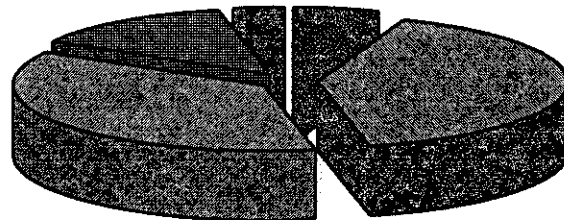


図2. 一対一でのピアカウンセリングを実践する場合、
ピアカウンセリングができると思いますか？



■ 十分できる ■ なんとかできる ■ どちらともいえない
 ■ あまりできそうもない ■ できない

図3. セミナーのどの部分が不足していたと思いますか？(複数回答)

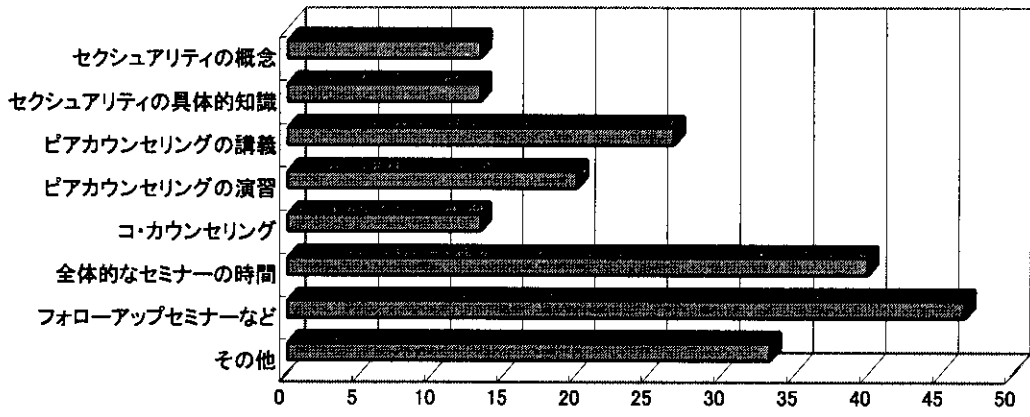


図4. ピアカウンセリング・エデュケーションを実践(計画)する上で、セミナーでの学びをどのくらい活用しましたか？

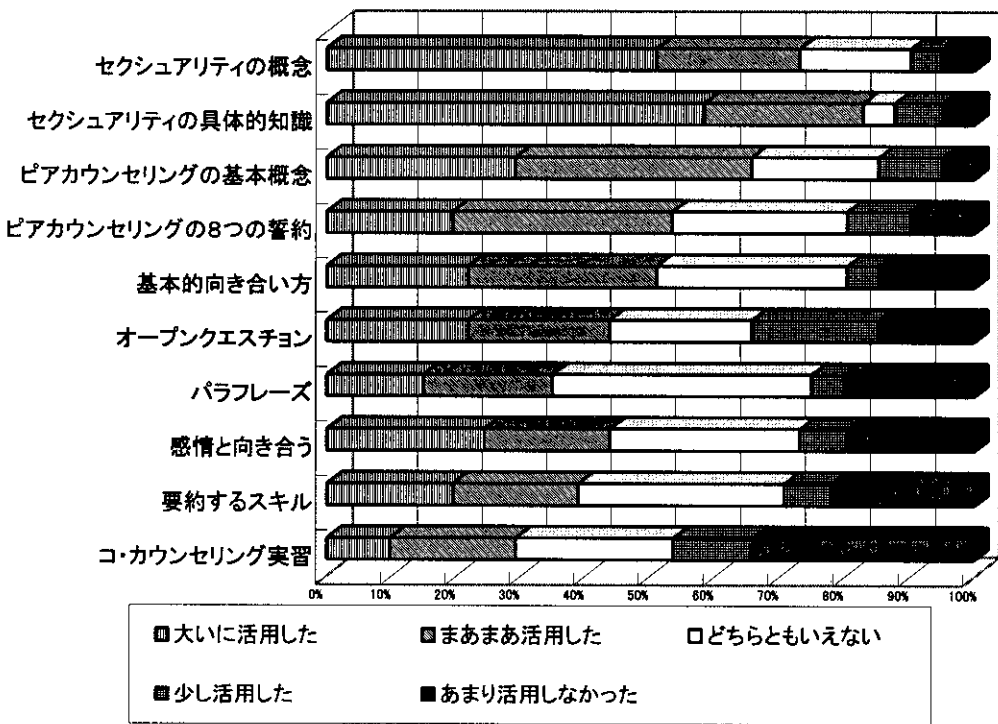


図5. セミナーのどの部分が不足していたと思いますか？(複数回答)

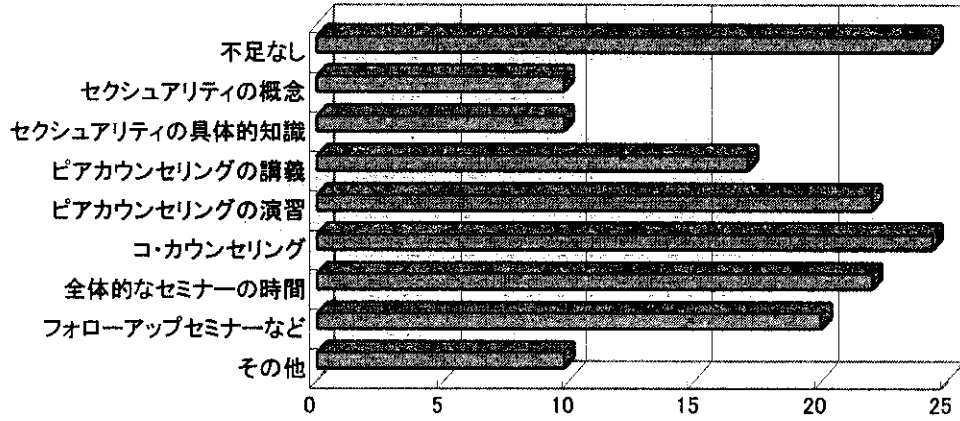
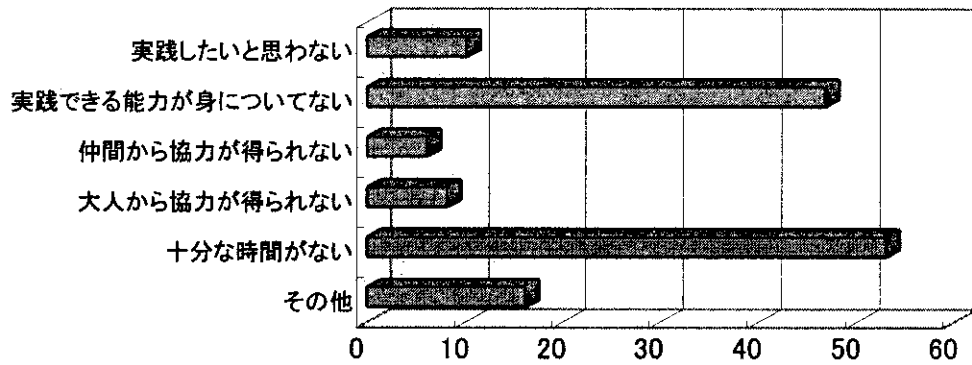


図6. 実践しなかった理由は何ですか？(複数回答)



平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

関連機関との連携によるピアカウンセリングの立ち上げとその効果的普及に関する研究（栃木県）

分担研究者 小林雅與 栃木県安足健康福祉センター 所長
研究協力者 矢板橋チツ子 栃木県児童家庭課 課長補佐
研究協力者 荒井 浩己 栃木県児童家庭課 主査

今回のピアカウンセリング参加高校への調査より、高校においては、校長先生、教頭先生、さらに性教育の事業企画を担当される保健主事の先生や養護教諭の先生方とも、高校生に対する性教育の必要性とピアカウンセリングの概要については理解をいただいていると思われる。

しかし、各高校5人の生徒の参加によるピアカウンセリング事業のみでは、不十分と考えられているように思われた。ピアカウンセリングに参加した生徒の高校での活用方法、指導者として養成されたカウンセラーの業務など、学校現場との十分な意見交換を経てピアカウンセリング事業の展開が求められる。そのために、今回各保健所単位に設置された連絡会議で検討することが必要である。

A. 研究目的

栃木県において、10代の妊娠中絶を減少させるため、県内の全高校を対象に実施したピアカウンセリング事業の継続的かつ発展的方法を提案することを目的とする。

B. 研究方法

今年度は、栃木県で初めて県内の全高校で各々5人の生徒を募り、ピアカウンセリングを実施した。以下具体的に、カウンセラー養成、カウンセリング参加者、カウンセリング実施場所、関係機関との連携について示す。

（1）カウンセラー養成

栃木県（児童家庭課）が、とちぎ思春期研究会に委託した。カウンセラー養成講座は、

4日間（30時間）、高校生・短大生・大学生に対して、自治医大看護学部教授及びゼミ学生により行う。

なお、とちぎ思春期研究会とは、昭和63年に設置され、会長を自治医大看護学部高村教授がつとめ、保健師、助産師、看護師、小中高の教諭及び養護教諭他の会員からなる約250人の任意団体である。

（2）カウンセリング参加者

栃木県（教育委員会）が、県内県立及び私立高校に、各高校5人程度の生徒参加を呼びかけた。

（3）カウンセリング実施場所

県内の6保健所ごとに、約50人ずつの高校生が参加し、1.5日間（1.2ヶ月間

隔)実施した。

(4) 関係機関との連携

各保健所ごとに関係者連絡会議を設置し、高校教諭、養護教諭、市町村保健師に事業の理解と協力を求めた。

以上、栃木県において始められたピアカウンセリングの概要を示したが、事業を継続するためには、高校との連携が最も大切と考え、ピアカウンセリング参加高校の教諭に対して質問調査を行った。

調査はピアカウンセリングが終了した平成15年1月に、各高校の教諭(校長、教頭、保健主事及び養護教諭)に行った。設問項目は、ピアカウンセリングの認知状況、同年代の者が相談にのる方法への理解、学校以外での性教育への理解、生徒へのピアカウンセリング参加呼びかけ方法、ピアカウンセリングへの生徒の反応、ピアカウンセリング参加生徒の活用、次回のピアカウンセリングへの参加希望などである。

C. 研究結果及び考察

ピアカウンセリングの参加状況は、県内の71高校から330人の生徒が参加した。また、ピアカウンセラーとして希望し、4日間の養成講座を終了し、知事の登録を受けた高校生、短大生は153人であった。

ピアカウンセリングに参加した高校教諭への質問調査結果は、以下のとおりであった。

調査票の回収状況は、表1に示すように9割の回収率であった。(表1参照)

ピアカウンセリングについては、表2に示すようにほとんど全員の方が、おおよその知識は持っている状況であった。(表2参照)

年代の近い者が相談者となるピアカウンセリングの方法については、表3に示すように、

約2割の者が専門職種の方が良いと考えていた。この点は、ピアカウンセリングの本質を十分に理解していただく必要があると思われる。(表3参照)

学校以外での性教育の必要性については、表4に示すように7~8割の者が、積極的な関わりを求めている。(表4参照)

今回のピアカウンセリング参加を生徒にどのように呼びかけたかについては、表5に示すように3~4割が特定の生徒に呼びかけたとの回答となっていた。(表5参照)

ピアカウンセリングに対する生徒の反応については、表6に示すように約8割の先生方は、生徒によっては関心を持つ者もいると考えている様であった。(表6参照)

ピアカウンセリングに参加した生徒を学校での性教育に活用するかについては、表7に示すように、校長先生及び教頭先生は活用を考えられる先生が多いのに比べ、保健主事及び養護教諭の先生方は必ずしも積極的な活用は考えていない傾向がみられる。学校での性教育を事業として企画される担当者として、保健主事や養護教諭の先生方は具体的な活用考えたときに、現段階での活用は難しいと思われるとも推測する。(表7参照)

次年度のピアカウンセリング参加希望に対しては、表8に示すように必ずしも積極的な参加を希望する先生方ばかりではない状況である。(表8参照)

D. 結論

今回のピアカウンセリング参加高校への調査より、高校においては、校長先生、教頭先生、さらに性教育の事業企画を担当される保健主事の先生や養護教諭の先生方も、高校生に対する性教育の必要性とピアカウンセリ

ングの概要については理解をしていただいていると思われる。

しかし、各高校5人の生徒の参加によるピアカウンセリング事業のみでは、不十分と考えられているように思われた。ピアカウンセリングに参加した生徒の高校での活用方法、指導者として養成されたカウンセラーの業務など、学校現場との十分な意見交換を経てピアカウンセリング事業の展開が求められる。そのために、今回各保健所単位に設置された連絡会議で検討することが必要である。

今後、求められることは、ピアカウンセリング参加高校生の具体的な活用について検討をすすめることである。次年度は、ピアカウンセリング参加生徒の活用について、関係者（ピアカウンセリング参加生徒自身及び両親、高校養護教諭など）への質問調査を行い、ピアカウンセリングをより広げるための検討を図りたい。

表1 調査票回収状況

| | 校長 | 教頭 | 保健主事 | 養護教諭 |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| 対象数 | 71人 | 71人 | 71人 | 71人 |
| 回収数 | 64人 | 65人 | 65人 | 65人 |
| 回収率 | 90.1% | 91.5% | 91.5% | 91.5% |

表2 ピアカウンセリングの認知状況

| | 計 | 知らない | 名称は知っている | よく知っている | 未記入 |
|------|-----------|--------|----------|----------|--------|
| 校長 | 64(100.0) | 1(1.6) | 14(21.9) | 48(74.9) | 1(1.6) |
| 教頭 | 65(100.0) | 0 | 22(33.8) | 43(66.2) | 0 |
| 保健主事 | 65(100.0) | 1(1.5) | 24(36.9) | 40(61.6) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 0 | 18(27.7) | 47(72.3) | 0 |

表3 若者が相談に応じる方法をどう思うか

| | 計 | 望ましい | 専門職の方が良い | その他 | 未記入 |
|------|-----------|----------|----------|---------|--------|
| 校長 | 64(100.0) | 41(64.0) | 14(21.9) | 9(14.1) | 0 |
| 教頭 | 65(100.0) | 50(76.9) | 11(16.9) | 4(6.2) | 0 |
| 保健主事 | 65(100.0) | 41(63.2) | 14(21.5) | 9(13.8) | 1(1.5) |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 44(67.7) | 12(18.5) | 9(13.8) | 0 |

表4 学校以外での性教育をどう思うか

| | 計 | 積極的に行うべき | 積極的には行わない方が良い | その他 | 未記入 |
|------|-----------|----------|---------------|----------|--------|
| 校長 | 64(100.0) | 46(71.9) | 8(12.5) | 10(15.6) | 0 |
| 教頭 | 65(100.0) | 49(75.4) | 9(13.8) | 7(10.8) | 0 |
| 保健主事 | 65(100.0) | 53(81.5) | 7(10.8) | 5(7.7) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 46(70.8) | 7(10.8) | 9(13.8) | 3(4.6) |

表5 生徒へのピアカウンセリング参加呼びかけの方向

| | 計 | 全生徒 | 特定生徒 | その他 | 未記入 |
|------|-----------|----------|----------|---------|--------|
| 校長 | 64(100.0) | 30(46.8) | 22(34.4) | 8(12.5) | 4(6.3) |
| 教頭 | 65(100.0) | 35(53.8) | 20(30.8) | 8(12.3) | 2(3.1) |
| 保健主事 | 65(100.0) | 32(49.2) | 29(44.6) | 4(6.2) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 38(58.5) | 21(32.3) | 6(9.2) | 0 |

表6 ピアカウンセリングに対する生徒の反応

| | 計 | 関心ない と思う | 関心を持つ生徒も いると思う | その他 | 未記入 |
|------|-----------|-------------|-------------------|---------|---------|
| 校長 | 64(100.0) | 6(9.2) | 54(83.1) | 2(3.1) | 2(3.1) |
| 教頭 | 65(100.0) | 7(10.6) | 56(84.9) | 1(1.5) | 1(1.5) |
| 保健主事 | 65(100.0) | 10(15.4) | 50(76.9) | 5(7.7) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 14(21.5) | 51(78.5) | 0 | 0 |

表7 ピアカウンセリング参加生徒の学校性教育での活用

| | 計 | 考えている | 考えていない | その他 | 未記入 |
|------|-----------|----------|----------|----------|---------|
| 校長 | 64(100.0) | 33(51.5) | 21(32.8) | 9(14.1) | 1(1.6) |
| 教頭 | 65(100.0) | 40(61.5) | 18(27.7) | 7(10.8) | 0 |
| 保健主事 | 65(100.0) | 24(36.9) | 26(40.0) | 15(23.1) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 21(32.3) | 27(41.5) | 17(26.2) | 0 |

表8 次回のピアカウンセリング参加希望

| | 計 | 参加させたい | 参加させたくない | その他 | 未記入 |
|------|-----------|----------|----------|----------|---------|
| 校長 | 64(100.0) | 48(75.0) | 10(15.6) | 5(7.8) | 1(1.6) |
| 教頭 | 65(100.0) | 48(73.9) | 9(13.8) | 7(10.8) | 1(1.5) |
| 保健主事 | 65(100.0) | 32(49.3) | 24(36.9) | 9(13.8) | 0 |
| 養護教諭 | 65(100.0) | 38(58.4) | 12(18.5) | 15(23.1) | 0 |

関連機関との連携によるピアカウンセリングの立ち上げと その効果的普及に関する研究（高知県）

分担研究者 家保 英隆 高知県健康福祉部健康増進課 課長

研究協力者 西本 靖男 高知県健康福祉部健康増進課 課長補佐

ピアカウンセリングの立ち上げその効果的普及の為に、行政が取り組む際に考慮すべき要点を抽出することを目的とする。方法として、高知県がこれまで実施してきたピアカウンセラー養成講座及び同養成講座修了生による高校生対象のピアカウンセリングに関する、養成講座受講者及び参加高校生の意見を分析するとともに、養成講座応募者に対する無記名のアンケート調査を行った。結果としては、ピアカウンセリングの立ち上げと普及には、①養成講座の内容充実と開催方法の工夫、②ピアカウンセラーの活躍方法の工夫、③ピアカウンセラー相互交流の場の必要 等が明らかとなった。

A. 目的

地域において新たにピアカウンセリングを実施するためには、活動するピアカウンセラーの養成とともに、ピアカウンセラーの活動を支援し、継続して活動できるような環境づくりが必要である。

ピアカウンセラー養成については、看護学生等を対象に授業の一環として、民間団体や行政と取り組んでいた実績があるが、行政が主になり地域をベースにした取り組みの報告はほとんどない。

また、ピアカウンセラーの自主的活動については、日本家族計画協会の支援を受けたU-COM等が首都圏で活動しているのみで、地方都市においてはそのような活動は見当たらない状況にある。

高知県では多い十代の人工妊娠中絶への対応策として、学校保健への支援とともに、平成12年度からピアカウンセリングに取り組んできた。そこで、高知県におけるピアカウンセラー養成講座等の活動を分析することにより、ピアカウンセリングの立ち上げとその効果的普及のために、行政が取り組む際に考慮すべき要点を明らかにする。

B. 方法

平成12年度以降、高知県で実施したピアカウンセラー養成講座の内容及び受講生のアンケート調査を収集し、分析する。併せて、平成14年12月に、過去3年間の養成講座応募者に無記名のアンケート調査を実施した。アンケート調査の内容は、性に関する知識、自己決定について、性教育の状況、ピアカウンセラー養成講座等についてである。

C. 結果

1) 3年間の養成講座の推移

高知県でのピアカウンセラー養成講座は平成12年度から実施しているが、基本的な枠組みは3年間同じである。

養成講座は講座編と実践編からなる。講座編は、ジェンダーや妊娠・性感染症等の性に関する知識を学習する場として、1回3時間計10回からなる。各回修了時に確認テストを実施し、全体の8割以上出席者に対して知事名の修了証書を交付した。実践編は、講座編修了者を対象にピアカウンセ

セリングを実施するための手法やグループワークを行い、最終回に高校生を対象としたピアカウンセリングを実施した。実践編も8割以上の出席者に修了証書を交付した。

養成講座の内容及び講師については、自治医科大学等での取り組みを参考に内部で検討し、その内容に応じた講師を県内関係者から選定し依頼した。その結果、保健所長や看護学校教員が多数を占めることとなったが、ジェンダー等の保健従事者では対応が難しい分野については、地元大学の教育学部教官に依頼した。

講座の内容は、受講生の意見を踏まえ、避妊・妊娠等の女性の性に関する時間や性感染症に関する時間を増やす等、適宜内容の見直しを行った。

受講生の募集方法は、医療系の大学、短大、専門学校に募集案内及び申込用紙を送付し、担当者が説明に回った。合わせて、マスコミ等を通じて受講生募集の案内を行った。2年目以降も同様に行ったが、1年目受講生の友人やピアカウンセリング参加の高校生が応募するなど、口コミでの参加があった。募集に際しては男女の別をつけていなかったが、結果的には女性が圧倒的に多かった。

また、ピアカウンセリングに参加する高校生の募集は、高知市及び周辺の高校に案内を行い、合わせて養護教諭に募集を依頼した。しかしながら、特定の高校からの参加に偏る傾向があり、工夫を要する。

3年間の応募者数及び修了者の状況は表1のとおりである。応募者に対する修了者の割合が低く、また、年々、応募者数及び修了者数が減少している。しかしながら、高校生対象のピアカウンセリング終了後の報告書には、修了者及び参加高校生から肯定的な感想が多く寄せられた。

2) 3年間の応募者へのアンケート調査

3年間の応募者108人（うち、修了者28人）に対しアンケート調査票を送付し、30人（うち、修了者17人）から回答があった。

未修了者13人の理由としては、「他に用事があった」が10人と最も多かった。長期にわたる講座日程について何らかの対応が必要と考える。受講動機については、友人から聞いて参加した者の修了率が高い傾向があり、口コミによる情報提供も積極的に活用すべきと考える。

講義の内容に関連して、現在の性感染症等についての知識を聞くと、「性感染症感染者の易エイズ感染性」、「エイズ感染後に検査で感染が判明する期間」が正解率が低かった（表2）。印象に残っている講義内容としては、「妊娠、中絶等の女性の性」、「避妊、コンドーム使用」等に加えて、「ピアカウンセリング」に向けての受講生相互間の練習や高校生対象の実地カウンセリングをあげている。知識学習面だけでなく、実技面を十分に踏まえた内容が求められているが、反面、知識についても再度の学習等の枠組みが必要であろう。

講座全体の評価として、再受講への希望を聞くと、肯定的な割合が修了者・未修了者ともに高く、講座内容は一定評価されているものとする（表3）。

3) 養成講座修了生の活動

修了生の活動としては、ピアカウンセラー養成講座への協力や保健所が実施する学校での性教育へのスタッフとしての参加、エイズイベント等への協力などがあり、平成13年度は7回延べ17人、平成14年は10回延べ41人にのぼった。しかしこれらは、単発に企画された事業であり、ピアカウンセリングとは言い難いものである。

修了生からは、① 高校生対象のピアカウンセリングが目標になってしまって、そ

の後の活動につながらないこと、② 修了後の修了生間の横のつながりが取りにくいこと、などの問題を指摘する記録がなされていた。

ピアカウンセラー養成講座修了生による電話相談の実施を希望した意見もあったが、定期実施に向けて人材の確保が困難であったため、実施に至らなかった。

D. 考察及びまとめ

保健行政が主になったピアカウンセリングを実施する場合に、留意すべき点としては次のことが考えられる。

1) ピアカウンセラー養成について

ピアカウンセラーとして対応する基礎として、性に関する知識等を十分理解し、自分のものとする必要がある。この場合、養成講座の参加者が専門及び学年等により既存の知識レベルが様々であることに留意する必要がある。高知県の場合、参加者の学校が異なるため、参加者のレベルの統一に苦慮した面もあるが、反面、参加者個人の意見も様々であり、議論が深まった点はメリットである。

養成講座の内容については、この研究班の堀内成子分担研究者による研究班でまとめられるが、いずれにしろある程度の時間を必要とされよう。学業等で忙しい若者の現状を踏まえると、集中的なスケジュールで企画する場合も、高知県のように分散的なスケジュールで企画する場合であっても、開催時期や時間帯、また一回あたりの時間数等、十分配慮しなければならない。出席すべき講座を単位制として、同様内容の講座を年間複数回開催するなどの工夫も一方法と考える。

養成講座参加者の募集については、関係する学校への案内はもちろんであるが、興味のある若者同士の口コミ・情報ネットを

活用することも考えるべきであろう。また、男女比についても一方に偏らないように留意すべきである。

2) ピアカウンセリングの実施

高知県では実践編の最終回に高校生を対象としたピアカウンセリングをイベント的に実施しているが、それでピアカウンセリングを実施していると言うには不十分であることはいうまでもない。

学校を介しての高校生の募集では、学校行事としての参加なのか、生徒個人としての参加なのかの判断が難しく、結果として、特定の学校の生徒に偏りがちである。また、参加した高校生が特に関心のある高校生である可能性が高く、一般的な普及に結びつきにくいように思われる。

若者が気まぐれでもいいので、自発的に何となく参加できるようなピアカウンセリングの場の提供が理想的であるが、現実の行政施策としては難しい状況にあると思われる。

3) ピアカウンセラー養成講座修了生の活動について

一つの目標である高校生対象のピアカウンセリングが終わった後の、ピアカウンセラー養成講座修了生の活動の場が求められる。新たな目標や活動の場がないと、一旦高揚した活動意識が急速にしぼんでしまう可能性が高いことから、保健行政のサイドから継続した活動の場を提供する仕組みを設ける必要がある。

ピアカウンセラー養成講座修了生は学校等が別々であり、後の連絡が取れにくいことから、この点にも留意すべきである。フォローアップのために、修了生間や行政とのメールネット等も考えてもよいと思われる。

さらに活動を継続すれば、修了生の年齢

も毎年上がり、また、就職、卒業等で県外に移動する場合もある。ピアカウンセリングを担当できる人材の動向に留意した仕組みを考えるべきである。

4) まとめ

以上、保健行政が主となってピアカウンセリング事業を実施する際の留意点について述べた。

この事業は、ピアカウンセラー及びピアカウンセリング参加者の自発的な参加を基礎として展開すべきものであり、その点を確保できれば自立的な活動につながっていくことが期待できる。他地域での活動を期待する。

表1 年度別応募者及び修了者の状況

| | 講義編 | | 実践編 | |
|------|-----|-----|-------|-------|
| | 応募者 | 修了者 | 応募者 | 修了者 |
| 12年度 | 46 | 28 | 15 | 13 |
| 13年度 | 42 | 14 | 12 | 10 |
| 14年度 | 20 | 8 | 8 | 5 |
| 合計 | 108 | 50 | 35 | 28 |
| | | | 修了率 | 修了率 |
| | | | 60.9% | 86.7% |
| | | | 33.3% | 83.3% |
| | | | 40.0% | 62.5% |
| | | | 46.3% | 80.0% |